

魅力再発見！わが町の伝統文化

福岡の 又ぜえ

日常の困難を笑いに変え、
しなやかに生きる知恵が詰まった
「又兵衛(又ぜえ)」さんのとんち話

福岡県の福岡町は、平成17年津屋崎町との合併により福津市となりましたが、その名は海岸線や駅名など、今も地域の随所に残っています。そんな福岡町で古くから親しまれてきた民話のひとつに、「福岡の又ぜえ」さんのお話があります。又ぜえさんは、江戸時代が始まる少し前、戦国の争乱が続く時代に福岡に実在したと伝えられる人物です。時代の荒波にもまれ、貧しさに苦しみながらも、ユーモアを忘れずに生きたその人柄が人々の心をとらえ、今日まで語り継がれてきました。

又ぜえさんのとんち話に登場する「おさん狐」の舞台となっているのが、花見松原です。手間を惜しまず守り育てられてきた松林は、今も美しい景観を保ち、訪れる人を迎えています。



物語の舞台となったと思われる松原周辺。地域のの人たちによって植樹や松葉拾いがおこなわれている。



かつて馬方として人や荷物を運んでいた又ぜえさんも、この松原の中を行き来していたことでしょう。今回は、人を化かすいたずら狐「おさん狐」を、とんちで見事に返り討ちすると共に持ち前のアイデアでひと儲けする、痛快な一話をご紹介します。

とんち話 おさん狐

ある夜道、馬方の又ぜえは、足にケガをしたという若い娘に出会います。しかし又ぜえは、すぐにその娘が人を化かしていたずらをする「おさん狐」だと見抜きました。又ぜえはしめしめと策を巡らし、親切なふりをして娘(狐)を馬の背に乗せ、そのまま自宅に連れ帰り、「松葉でいぶしてやる」と脅しました。命乞いをする狐に、又ぜえは「金の茶釜に化けろ」と命じます。

茶釜の話は、何のことですかいのう。」という和尚が「このうそつきが！」とその手ぬぐいの上から腫れものを押さえつけました。すると、仕込んでいた芋と梅干しが潰れ、赤い汁が流れ出します。又ぜえが「あいたた！腫れもんがつぶれた」と嘘の悲鳴をあげると、すっかり騙された和尚は「こりゃあ、ほんものじゃった！すまん、すまん」と、逆に謝るしかありませんでした。

又ぜえは、狐が化けた見事な「金の茶釜」を、日頃から茶釜を探していたお寺の和尚に高値で売りつけ、大金を得ました。その翌日、和尚がその茶釜を火にかけると、おさん狐は「熱か！熱か！」と叫びながら正体を現し、逃げ出してしまう。カンカンに怒った和尚は、その足で又ぜえの家に行き「又ぜえ、お前また、わしばだましたな。金ば返せ」と怒鳴り込んできました。

しかしそれを予想していた又ぜえは、やわらかく煮た芋と梅干しを額にのせ、その上から手ぬぐいを巻いて「ひどい腫れものができちゃって、ここ2、3日は、どこにも行かれないで、寝込んでしまいます。」

参考資料



『ふるさとお話の旅(11)
福岡 筑紫ん国のおもしろか話』
(野村純一/監修 徳永明子/編 星の環会)

